

万葉の川心

横浜市立綱島小学校教諭 澤井 園子

鞆旅に思を發せる歌(卷第十二 三二五六番歌)

鈴鹿川八十瀬渡りて誰ゆゑか

夜越に越えむ妻もあらなくに

小春日和の穏やかな日に、大病を乗り越えた叔母を見舞った。とても元気で、退院に向けて気持ちにも張りがでていた。お見舞いは掛ける言葉も考えってしまうが、変わらない叔母の笑顔には心底ほっとした。ひとしきり話が弾んだ。その隣で叔父は、絶えず叔母を氣遣っていた。「もう大丈夫よ。」という妻に、「いや、まだまだ油断はならんぞ。」という夫。どんな危険からも守ろうとしているかのようだった。すぐに失礼したが、病院の長い廊下を歩きながら、連れ添って四〇年を越えた二人の絆を感じていた。やっぱり来てよかったですと思った。

鈴鹿川は鈴鹿山脈に発し、三重県亀山市・鈴鹿市を通り、四日市南方の三重郡桶町で伊勢湾に注いでいる。「鈴鹿川のたくさんの瀬を渡って、いったい誰のために夜道をいくのだろうか。待つべき妻がいるわけでもないのに。」この妻は身罷ったのかという説と、まだ若すぎて妻がいけないという説とあった。夜に川を渡るというのはとても危険で恐ろしいことと想像する。それでも越えるのは、むこうに待っている愛しい人がいるから。それならばどんな



瀬でも越えようと思うが、そんな妻もいないのに……。危険に立ち向かう勇氣は、守るべき人がいるから立ち上ってくるのかもしれない。自分一人だったら、どうでもいいのだ。でも、愛する人がいるなら、ここで倒れるわけにはいかない。どんな危険も乗り越えていかなければ……。そんな強さになるのだろう。二説が出てきたわけは、自然と心に落ちる。年浅くても、年を重ねても、想う気持ちに変わりはない。瀬を越えるのはいつも「あなた」がいるから。そういえば幼い頃、一人親の母を亡くしたら、どう生きていこうかと時折考えた。悲しみに耐える練習なのか、不安を乗り越えるためか、とにかく冷静になることを心に課していた。今、守るべき人を得て思う。失ったときのことを案ずるより、毎日を大切に生きようと。誰しも命の残りは分らない。でも、間違いなく、今生きている。そのことに感謝して。今を悔いなく、楽しく、そして、自分らしく。

帰りの電車。二人の子は父と母の腕の中で、ぐっすり眠っている。「道中いい子にしてくれてありがとう。」と心の中でつぶやく。「叔母さんはおう大丈夫だね。」窓の外、冬の夕陽はやさしい光で川の水面を照らしていた。さあ、家に帰ろう。日の沈む、それまでに。